



糖尿病の薬がわかる本

榎田 出 著

A5 頁176 2015年

本体 1,800円+税

[ISBN978-4-260-02160-9] 医学書院刊

評者 藤沼 康樹

医療福祉生協連家庭医療学開発センター長

内科系外来診療の場面において、糖尿病は最も頻度の高い慢性疾患の一つであり、治療によって予後を大幅に変えることが可能な疾患としても特別重要な位置にあると言える。家庭医療の世界では“糖尿病は慢性疾患ケア支援に関する全てがあり、慢性疾患を学ぶには糖尿病を学べ”と言われるほどである。そして、現代日本は超高齢社会となり、糖尿病に加えて多数の併存疾患を持つ高齢患者も多く、治療はより複雑になる傾向がある。したがって、糖尿病専門医だけで日本の糖尿病患者をカバーするのは不可能であり、慢性疾患に取り組むあらゆる医師、特に家庭医の糖尿病診療の質の向上が必須である。

そして、多面的アプローチを必要とする糖尿病診療では、患者-医師関係の中だけで診療が完結するのはもはや困難であり、看護師や管理栄養士、各種セラピストなどによるチーム医療、専門職連携実践(inter-professional work: IPW)が必要である。

本書は、糖尿病診療における薬物治療とその周辺に

関して、IPWに必要な共通の知識基盤を形成するために非常に有用である。記述はわかりやすいが、患者や一般市民向けの解説書のように単純化していないため、知識のブラッシュアップだけでなく、最近の進歩をきちんとアップデートできようになっている。特に処方原則や、併存疾患による投薬の考え方などは、糖尿病専門医ではない家庭医が読んでも多くの発見がある。また、「薬をやめられるか?」「ステロイドを投与されたときに処方をどう考えるか?」「注射し忘れたと言われたら?」など、糖尿病診療においてよく出合う問題についてもわかりやすく回答がなされている。

この本をテキストにして医師も参加した多職種学習会を行うと、お互いのコミュニケーションも豊かになり、より良いケアが提供できるようになるだろう。糖尿病診療に携わる、全ての医療者、専門職の皆さんに本書を推薦したい。